# 渡辺先生の思い出

橋本　操　六

昭和三十年夏、大分連隊旧兵舎の大学研究室に卒論の指導を得るためお尋ねしたのが、先生との出会いの最初である。三十一年に奉職した後は、大分県史料・大分県文化財保護行政・大分県史の編さんと一日も欠けることなく御指導を頂いた。また、大分県地方史、中世文書研究会のほか、大分の歴史、角川地名辞典や市町村誌の執筆でも的確な指導助言を頂いた。誠に感謝の念で一杯である。

さて、先生の思い出となると出会い後四十数年の小生の生活全てを語るのと同じになるので、その中から印象深かったものを二、三拾ってみたい。

先生は三十一年当時、津久見から列車で大学に通っておられた。県史料の校正のほとんどは車中でなされたにもかかわらず、小さな綺麗な字で加除訂正していただいたことが印象深い思い出の第一である。二番目は睡魔退治の名人であったことである。県史料の合宿による編集作業や古文書緊急調査などのとき、睡魔に襲われると我慢せず瞬時に深い眠りに入る。それも約十分間ぐらいで睡魔を退散させ、以前より増して精力的に仕事を続ける不思議な人であった。

次は話し方の特徴である。とくに古文書研究会での内容の解説では必ずといっていいほど、「…と書いチアル」という大分弁がつくことである。その口調や身振りは古文書をこよなく愛された先生ならではのものであった。

最後は「ご飯は御馳走である」の印象である。先生は若いころはヘビースモーカーを自負し、酒も人並みに嗜まれていた。しかし、生涯の研究には酒・タバコを不要とし、米食も自然と遠ざけるようにしていた。しかし、合宿などのときは米食中心にならざるを得なかった。これが先生には嬉しかったらしく、「御飯は御馳走でおかずはいらない」とおいしそうに召し上がられていたことは忘れられない思い出である。その先生も今はいない。合掌。

（大分大学講師）